

# 授業研究会に寄せてⅡ

なぜ「きく」なのか

2018.10.10

No.33

校長 渡邊 幸二

昨日、E先生から「お久しぶりです！」と朝のご挨拶をいただきました。そう、先週は出張やら人間ドックやらで、学校にあまりいなかったのです。人間ドックの暇くさいベッドの上で、私は以前から読みたかった「教師花伝書」とも格闘してきました（春の研修会で、遠藤先生からご紹介いただいた本です。みなさんもお読みになりましたか？）。

この本に出てくる無名の、しかし輝きを放っている教師はいずれも、授業中は物静かで言葉少なな教師でした。「話す」「語る」「説明する」「教える」教師ではなく、もっぱら「聴く」教師だったのです。



## 子どもの声を聴くこと－授業実践の基軸－

著者の佐藤学氏は、ある荒んだ中学校の奇跡的な改革を述べる中で、この改革が「小グループの共同によって互恵的な学び」を実現してきたところが大きいと述べています。

しかし、いったい何が子どもたちの協同的な学びを促進し、その学び合いを互恵的な学びへと発展させるのだろうか。（中略）…による研究授業はいずれも、**教師が虚心坦懐に子どものつぶやきに耳を傾けることが協同的な学びを促進する教師の活動の基軸である**ことを再認識させられる素晴らしい挑戦であった。（P44）



先月の職員会議でも協議したように、われわれの授業実践や子どもの生活を創っていく営みの中で「きく（聞く・聴く・訊く・利く）」が重要ポイントであることを認識しました。それは、もちろん授業の中で子ども同士が互いに「きく」「きき合う」という関係を指します。と同時に、佐藤学氏が述べるように**教師が子どもの声を「きく」**ことでもあります。つまり、浜田小学校にいる全ての人々が「きく」にスタンスを置かなければ、浜田小学校の改革はないということです。浜田小学校の全ての人々が「きく」を意識する、実践するということです。

そういう意味で、子どもにも、先生自身が意識するということでも（おそらく保護者も）、何らかの手立てが必要と考えます。私は、右のようなTシャツ（ポロシャツ）を作ってはどうかと考えています。「きく」を意識する、視覚的に刷り込む…そんなねらいです。くだらないとお思いでしょうが、前号でも述べたように、浜田小の「きく」はあまりできていません。何とかこれ乗り越えていかない限り、「互恵的な学び」には到達しそうにないと思うのです。やれることは何でもやるしかないとの思いで、ある方をお願いしてデザインしてもらいました。（詳しくは後日発表があるでしょう）



話を戻します。

佐藤氏は、子どもの発言が聴けるようになったポイントを「一つひとつの発言を関係の中で受容すること」にあると述べています。

授業における発言は、その一つひとつが偶然の出来事であるが、同時に必然の出来事でもある。どの発言も見えない織物のように関係しあいつながっている。その関係とつながりを認識することによって、教室のコミュニケーションは生きたかたちを露にする。熟練した優れた教師が、授業の中で子ども一人ひとりに対して創造的に即興的に対応できるのは、この見えない織物のような関係を認識できているからである。

子どもの発言やつぶやきを聴くということは、ただ、その発言やつぶやきの意味を理解することではない。教師が子どもの発言やつぶやきを聴くときには、その発言やつぶやきが、題材（テキストや資料）のどことつながって発せられているのか、他の子どものどの発言とつながって発せられているのか、そして、その子自身のそれ以前の考えや発言とどうつながって発せられているのか、この三つの見えない関係を認識することが必要である。(P46)



このような聴き方は直ちにできるものではなく、訓練が必要であるのだが、そういう意識で聴かない限り、われわれ自身が「きく」を獲得することは難しいと思うのです。佐藤氏はさらに言います。

### 授業において「聴く」ことが教師の中心的活動である

ですから、前述の教師たちは物静かで言葉少なな教師なのでしょう。

### 授業を見るポイント－授業の事実から学ぶこと－

さて、今日は貴重な授業研究会です。お二人の先生が授業を提案されますが、われわれは授業のどこを見ればいいのでしょうか。佐藤氏は言います。

(前略)経験年数が多い教師が、必ずしも学び上手とは言えないし、いくら経験年数を経ても、教育実習生のレベルと同様の授業の省察や実践しかできない教師も少なくない。とすれば、授業の事実から学べる教師と学べない教師との間には、どこに本質的な違いがあるのだろうか。

私は、この違いは、授業を「よい授業」「悪い授業」あるいは「よい指導法」「悪い指導法」というように「評価」する教師と、授業の事実をあるがまま「評価」しないで「省察」することができる教師との違いであると思う。授業の事実から学べない教師は、自分の尺度で授業の事実から「よい授業」「悪い授業」あるいは「よい指導法」「悪い指導法」の判別を行っているにすぎない。このような教師は、どんな授業の事実と出会っても、何も学ぶことができないのである。(P183)

さらに…。

校内研修において、「教師の教え方」を観察と批評の中心とするのではなく、「子どもの学びの事実」(どこで学びが成立し、どこで学びがつまづいたのか)を観察と批評の中心に置くこと(P188)

と主張されていました。

さて、今日の授業研究会はいかに……